天野弘之・井村哲郎編

『満鉄調査部と中国農村調査
――天野元之助中国研究回顧――』

不二出版　2008年　404＋7ページ

内山雅生（うちやま まさお）

近年，南満洲鉄道株式会社（以後，満鉄と略称）および同調査部に関する研究が，いくつか刊行されている。例えば，松村高夫・柳沢遊・江田憲治編『満鉄の調査と研究――その「神話」と実像――』（青木書店 2008年）や，岡部牧夫編『南満洲鉄道会社の研究』（日本経済評論社 2008年）など，大部の論文集である。かつては，浅田喬二氏を中心とする日本植民地研究の一環として満鉄等がとり上げられ，小林英夫氏によって精力的に研究成果が発表されたが，近年では中国側研究機関との共同研究も進み，日本語史料のみならず，中国語史料も活発に利用されるようになった。そのようななかで，本書によって，日本における中国農村研究のパイオニアの一人であった天野元之助氏の今までの膨大な研究成果を補完する資料が発表された意味は大きい。

本書の構成は，「Ⅰ　鼎談――天野元之助中国研究回顧――」，「Ⅱ　海南島旅日誌――昭和17年９月～18年３月――」，「Ⅲ　文革期中国訪問の記録――昭和41年11月～12月――」の３本であるが，1973年に静岡大学で行われた福島正夫・野間清両氏と天野氏の鼎談記録テープの再現が，天野中国学を検討する際には重要な資料となる。特に注目すべき点は，編者の井村哲郎氏によって付された膨大な注である。井村氏は「解題」のなかで，「現代の読者には分かりにくいと考えられる事項や人名については可能な限り注を付した」（393ページ）と述べているが，付された注そのものが，戦前期日本の中国調査を知るうえでは，きわめて重要な情報源であり，読み応えがある。

私が天野氏の姿を最初に目にしたのは，確か1970年代後半，京都の東洋史研究会の大会だった。当時京都大学大学院生だった足立啓二氏の報告の際に，天野氏は最前席に座り，報告が終るや否や立ち上がり，「僕はそんなもの見たことがない」と，ご自分の中国調査の経験から鋭く批判された。お名前の「元之助」を「ゲンノスケ」と読んだ者に対して「モトノスケ」と訂正を要求したという逸話も聞いていたから，噂に違わず「ガンコオヤジ」の第一印象だった。その後２回ほど枚方市のご自宅を訪問した。最初は久保田文次・小島淑男両氏に同行した。天野氏は和服を着て穏やかに久保田・小島両氏と談笑していられたが，話が私の研究に及ぶと雰囲気は変わってきた。「そもそも君は今どんな勉強をしているのか」と尋ねられたので，「『中国農村慣行調査』を研究会で輪読している」と答えると，「どうして素人の農村調査など読むのか」と厳しくたしなめられたことは今でも忘れられない。当時の私にはどうしてそこまで怒られるのか見当もつかなかったが，先輩両氏のたしなめでその場は終了した。その後学説史整理をする過程で，いわゆる「質問応答録」という『中国農村慣行調査』独自の調査理念や調査方法，さらに記述方法等を知り，いわゆる「慣行班」の人々と満鉄調査マンとの「乖離」を理解することができた。そのような天野氏の『中国農村慣行調査』への批判は，小野忍氏や幼方直吉氏が「中支でやった商業慣行調査」との比較から，「あれだけのどえらい活字印刷だっていらないところがたくさん出てきますよ」（184ページ）との発言に垣間見ることができる。このように至るところに天野氏の人柄を偲ばせる発言が再現されていることも興味深い。中国研究者のみならず，広く農村研究を志す者にとっても「調査マン天野」は多くのヒントを与えてくれる。

（宇都宮大学国際学部教授）